

3 研究のまとめ

(1) 研究の成果

本研究を通して、「心をつなぐ活動」を工夫するために、以下のような手立てが有効であることが分かりました。人とかかわりの中で心地良さを感じていくことで、人とかかわることの楽しさを感じ、進んでコミュニケーションを図ろうとする児童の姿が見えました。

ア 外国語に慣れ親しませるための手立て

- (ア) 3つの段階の「きく」活動の設定を教師が意識することで、付けさせたい力が明確になりました。「聴く活動」で、注意深く耳を傾けることで日本語と英語の発音の違いに気付いたり、話の内容を推測して聴いたりする姿が見られました。そして、「訊く活動」で、これまでかかわってきた体験を想起して相手のことを精一杯思いながらかかわっていく「心をつなぐ活動」に児童が取り組みました。その結果、相手の新たな面を発見したり、相手の思いに触れて納得したりする体験や、自分のことを理解してもらえたと感じるコミュニケーション活動ができたと考えます。
- (イ) 単元の始めに、ゴールの活動を児童と共に設定することで、英語表現に慣れ親しんでいく過程に意欲をもって取り組ませることができました。「友達のために作る」「友達に自分の紹介ページを作ってもらおう」というゴールの活動は、児童にとって意欲が高まる動機付けになりました。相手とかかわり、相手が喜ぶことをしたいという気持ちをもって、インタビューをするための英語表現に慣れ親しんでいくことができたと考えます。
- (ウ) 他教科や既習事項と関連させて授業を展開することが、児童にとって英語表現を理解する大きなヒントとなりました。また、日常生活の中の出来事を取り入れるのも、担任ならではの取組だと思えます。身近にある出来事等をちょっと話題に盛り込むだけで、児童の関心が高まりました。

イ 「目指す姿」を共有するための手立て

- (ア) 不安感をもって外国語活動をしている児童がいたことを受け、全員が安心感をもって楽しく活動に取り組んでほしいと考えました。小学校段階で苦手意識を作ってしまうようなことは避けなければなりません。心地良いコミュニケーション活動の体験を積み重ねていくことが一番の手立てですが、その前に外国語活動での「目指す姿」に気付かせ、具体的な視点を示して安心させていくことで、どの児童も前向きな気持ちで取り組むことができたと思えます。
- (イ) 相手と向き合い、丁寧にかかわる態度で接し、相手の思いを受け止めながら自分の思いも伝えようとする態度は、どの教科でも求められることですが、外国語活動の中で、特にそのことを丁寧に意識して、相手にかかわらせていくことの意義を体験から学ばせていくことができたと考えます。
- (ウ) 児童の中に「目指す姿」を見付け、それをほめることを重ねていくことで、児童は「目指す姿」に迫る行動を目指して活動していました。また、友達の中に「目指す姿」を見付け、自分もそうありたいという感想をもつ児童もいました。目標、指導、評価の一体化を図ることで、英語を全て理解することを評価されると考えていた児童が、コミュニケーション活動への意欲や態度にこそ意味があると実感するようになったと考えます。

(2) 研究の課題

ア 5年後の教科化を見据えて、これまで通りコミュニケーション能力の素地を養うという目標は大切にしながらも、言語への気付きの質をさらに高めていくような手立てを考案していく必要が

あると考えます。

イ 外国語への慣れ親しみの観点では、もう一歩進んで、外国語を使って伝えることができる、聞き取ることができるということに喜びを感じている児童もいたので、態度面だけでなく外国語を使ってできることが明らかになるような活動も仕組んでいく必要があると考えます。